

ZINEを通して見えたもの

萱野 史菜、青木 麟平

「クリエイティブなことをしたいすべての人のために存在する出版物とはなにか？」と聞かれてあなたは何を思いつくだろうか。

2000年代に入ってから『ZINE』という出版物が、日本の若者のなかで密かなブームとなりつつある。ZINEとは、自らの趣味趣向を自由に表現して作った出版物のことで、誰でも自由に作ることができる。それゆえ、写真や絵、または詩などを安価な紙に書いてホッチキス留めしたのもZINEであり、その見た目も多彩だ。つまり、ZINEとは、誰からの選定も受けない、その人のありのままがつまっているものなのだ。

「日本におけるZINEの流行は反動的なものであると思う。」

日本で稀なZINE専門ショップを営む櫻井史樹さんはこう分析する。実感できない情報で溢れる現代だからこそ、実際に手で触れ、確かなものとして感じることでできるZINEが流行りはじめているのかもしれない。そこには、SNSなどのウェブでは感じることでできない人の温かみが存在するのだ。

日本人のなかに存在する「芸術に対する垣根」。これは台湾での展示会やニューヨークのZINEショップを訪れて、櫻井さんが感じたことだ。彼はこのような経験を通して、日本人の芸術文化に対する敷居の高さを感じたという。そもそも、ZINE生誕には諸説があるが、主に1900年代のアメリカと言われている。その後韓国、フランスなどで盛り上がりを見せてきた。実際、彼も海外交流を通じてZINEに対する日本と海外での反応の違いを目の当たりにした。日本でZINEは流行ってはいるものの、それは内輪だけであって、総じてみると、ZINEを実際に手にとったり、購入したりする人の数が少ないという。たしかに、「芸術」と聞いた際に、どこか遠いもので、とっつきにくい印象をうける日本人は少なくないように思える。現に、他国と比較して、日本は芸術家後援に資金を出さない傾向にあり、若手アーティストが生き延びるのは非常に困難な社会だと言われている。すべての日本人とは限らないが、多くの日本人のなかに確実に存在する「芸術に対する垣根」。この垣根をZINEを通じて取りはらっていくこと、「これは僕のライフワークなのかもしれない。」彼はそう語った。

ZINEという新しいブームのなかで日本人の芸術に対する海外との意識の違いを垣間見ることができた。本来、芸術とは誰にとっても身近なものであるべきではないだろうか。垣根をのりこえる存在として、ZINEはこの現状に一石を投じるかもしれない。そのためには、作品が受け入れられる雰囲気、そしてなにより気軽に手に取ってくれる読み手が必要だ。

今現在、日本でZINEについて知っている人がどれくらいいるだろうか。恐らくそう多くはないと思う。かくいう私も、ZINEについてなにか記事を書こうと思いつくまで、その中身については全くといっていいほど知らなかった。簡単に言うと、誰もが思うままに芸術を表現できる場、それこそがZINEなのである。私は普段から芸術に慣れ親しんでいるというわけではないが、今回の取材を通して日本の芸術文化について改めて考えさせられたような気がした。 青木麟平

今回、取材先で様々なZINEにふれ、実際にその温もりを感じた。スマートフォンなどが

普及し便利な世の中にはなっただと思うが、紙やハンドメイドのものに強い魅力を感じる自分を再確認した日だった。 萱野史菜